北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

『高瀬舟』試解：相対的、あるいは相対化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西原, 千博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007396

『高瀬舟』試解

―相対的、あるいは相対化―

西原千博

「だとすれば、あるいはこの矮小化自体がこのテクストの重要な主題なのではないのか。」
（R．スコールズ『テクストの読み方と教え方』より）

Ⅰ

森鴎外の『高瀬舟』（「中央公論」大正五年一月）の研究史について、三好行雄氏は次のようにまとめている。

だから、主要な論点は（1）ふたつの主題が分裂しているか否か、（2）分裂しているとして、両者のいずれかに比重がおかれているか、（3）二つのテーマを統一する主題は果たして発見できないのかといった点に集中している。

（「『高瀬舟』―研究史と作品論―」―「別冊国文学・森鴎外必携」平成一年十月）

ここでいう、二つの主題は、これまで「知足」と「安楽死」とされてきた。これは鴎外の『高瀬舟縁起』（以下『縁起』と略す）（「心の花」大正五年一月）を踏まえたものである。鴎外は『翁草』の「流人の話」がこの話の元になっていることを示しているので、先に、『翁草』を引用しよう。

流人を大阪へ渡さるるに、高瀬より船にて、町奉行の同心之を守護して下る事なり。（中略）或時一人の流人、公命を承ると否、世に嬉しげに、船に乗てもいさゝか愁える色不見。守護の同心是を見て、卑賤の者ながらよく覚悟せりと感心して、船中にて彼者に対して称嘆するに、彼云く、常に僅かの営に、渇々粥を啜りて露命をつなげしに、此御吟味に逢候てより久々在牢の内、結構なる御養いを戴き、いたづらに遊び暮らし冥加なき上に、剰え、此度鳥目二百文下され（中略）て、島へ遣わさる事、如何なる果報にて如此なりや、（中略）悦ぶ事限りなし。此者西陣高機の空引に傭れありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の者、同く其日を過ごし兼ね、貧困に迫りて自害をしかゝり、死兼居けるに、此者見付て、迚助かるまじき体なれば、苦痛をさせんよりはと、手伝いて殺しぬる、

其科に仍り、島へ遣わさるゝなりけらし。其所行もとも悪心なく、下愚の者の弁えなき仕業なる事、吟味の上にて明白なりしまゝ、死罪一等を宥められし物なりとぞ。彼守護の同心の物語なり。

（神沢貞幹『翁草』巻百十七　「流人の話」　本文は新字、新仮名遣いに改めた。）

この『翁草』の文章を読んで、鴎外は次のように述べている。

私はこれを読んで、その中に二つの大きい問題が含まれていると思った。一つは財産と云うものの観念である。銭を持ったことのない人の銭を持った喜びは、銭の多少に関せない。（中略）二百文を財産として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かっていて死なれずに苦しんでいる人を死なせて遣ると云う事である。人を死なせて遣れば、即ち殺すという云うことになる。どんな場合でも人を殺してはならない。（中略）従来の道徳は苦しませて置けと命じている。しかし医学社会には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦しむものあったら、楽に死なせて、その苦を救って遣るが好いと云うのである。これをユウタナジイという。楽に死なせると云う意味である。高瀬舟の罪人は、ちょうどそれと同じ場合にいたように思われる。私にはそれがひどく面白い。

ここで述べている「二つの大きい問題」というものが、これまで主題として読まれてきたのである。このことについて、菅聡子氏は次のような指摘をしている。

『高瀬舟』論においては「知足」「安楽死」という二つの用語が自明のものとして用いられ、その多くはこの二つの主題の分裂あるいは統合を焦点化してきた。しかし、この二つの用語はテクスト内部には存在しない。

（「森鴎外『高瀬舟』を〈読む〉こと」―『文学の力×教材の力　中学校篇三年』平成十三年六月　教育出版）

菅氏が指摘しているように、「知足」と「安楽死」という二つの言葉は『高瀬舟』の本文にはない。一応、「知足」については「足ることを知ること」とあり、それを「知足」としてきた。一方の「安楽死」の方は『縁起』の「ユウタナジイ」を受けてのもので、この二つを同列に並べるのは問題があるだろう。『縁起』に従うのなら、「財産と云うものの観念」と「ユウタナジイ」（「安楽死」）とすべきだろう。因みに「財産」という言葉も本文にはなく、本文では「貯蓄」になっている。本稿では、『縁起』を踏まえて考察するので、「財産」と「安楽死」としたいが、「知足」も視野に入れつつ考察したい。ともあれ、「財産」もしくは「知足」としたところで、従来から言われてきたように、この二つの主題は別々のことがらで統一されないように見えることには変わらない。

しかしながら、この一見無関係に見える二つの主題も、統一するとは言えないが、共通するものがあるのではないかと考える。それは、どちらも見方によって意味や価値が変わってしまうものだ、ということである。どちらも相対的なものだということである。この相対的、あるいは相対性ということについて、入不二基義氏が次のように述べている。

通常、「相対性」とは、観点や視点や文脈などに依存することであり、「絶対性」とは、そういうものに依存しないことであると考えられる。例えば、何が真理であるかは、ものの見方や時代や文化的背景などに依存していると考えるならば、真理**はそれ**らに対して相対的なものとなる。

（『相対主義の極北』平成十三年二月　春秋社）

本稿でも、ここでの捉え方にならって、観点や文脈などに依存している場合は相対的とし、依存していない場合は絶対的とする。「安楽死」については、比較的相対的ということが解りやすいだろう。「安楽死」とは先の『縁起』にあったように、「楽に死なせて、その苦を救って遣る」ということだが、これについては常に是か非かということが問われ続けている。つまり、見方によっては是、すなわち救いとなり、見方によっては非、すなわち殺人ということになるのである。しかも、「従来の道徳」と「医学社会」ともあって、その捉え方は見方や文化などに依存していると言えるのであり、「安楽死」（の問題）は相対的なものだと言えるだろう。「財産」もまた同様に言えるのではないか。ただ、「知足」ということになると、一概に相対的とは言えないかもしれない。

いや、結論を急がず、「知足」も視野に入れながら、「財産」と「安楽死」という二つの主題を中心に、相対的ということが、共通するものと言えるかどうか、作品を読んでいきたい。なお、その際には、先に述べたように『翁草』、『縁起』を踏まえて読むこととする。

Ⅱ

作品の冒頭は「高瀬舟」の一般的な説明である。「遠島」になった者の「非常に悲惨な境遇」が示される。

その後に、「類のない、珍しい罪人」である「喜助」について語られる。原典の「世に嬉しげに、船に乗てもいさゝか愁える色不見。」というのを受けて、情景が具体的に描かれる。

夜船で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助はよこになろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで、目には微かなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして、不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気兼ねがなかったなら、口笛でも吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

作品の最初には「遠島」の悲惨さが描かれていた。それに対して「喜助」は「楽しそう」にしている。まさに「類のない、珍しい罪人」であり、「不思議」である。ただし、ここで一つ注意しておきたいのは、引用の前半は話者の視点で語られているが、後半は「思われた」と「庄兵衛」の視点になっていることである。「庄兵衛」の語りには主観が入るが、語り手の方は客観的だと読者は思うのである。そのため、「その額は晴れや

かで……」というのは、事実ということになるのである。実は、これが事実であるということが、この作品の「喜助」像に大きく係わっている。というのも「庄兵衛」の「喜助」の捉え方はすべてこの場面の延長線上にあるからである。その結果、読者は本来「庄兵衛」が勝手に思っているだけに過ぎないようなことについても、事実として読んで行きやすいということである。それにしても、なぜ「喜助」は楽しそうにしているのか。この後、その理由が明かされていく。

喜助はにっこり笑った。「御親切に仰ゃって下すって、ありがとうございます。なる程島へ往くということは、外の人には悲しい事でございましょう。その心持はわたくしにも思い遣って見ることが出来ます。しかしそれは世間で楽をしていた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参ったような苦みは、どこへ参ってもなかろうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣って下さいます。（中略）それからこん度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持っております。」

（中略）

喜助は語を続いだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云うお足を、こうして懐に入れて持っていたことはございませぬ。（中略）それがお牢に這入ってからは、為事をせずに食べさせて戴きます。（中略）島へ往って見ますまでは、どんな為事が出来るかわかりませんが、わたくしはこの二百文を島でする為事の本手にしようと楽しんでおります。」

「遠島」というのが、「外の人には悲しい事」だが、「喜助」にとってはそうではなかった。それは「京都」での生活が踏まえられたものだった。「外の人」には「結構な土地」だが、「喜助」にとっては苦しい土地だったというのである。これは「喜助」が楽しそうにしている理由であるが、同時に「類のない」存在であることも示している。しかし、結果として、「遠島」や「京都」というのが、人によって、見方によってまるで違う意味、違う価値のものになるということが示されている。さらに、「牢」もまた「喜助」にとってはただで食事が出来る良い場所ということにもなり、これもまた相対的なものになっている。ここで言う「外の人」というのは、この当時の一般的な人ということだろう。「遠島」を悲しむことや、「京都」が結構なこと、「牢」が苦しいことなど、この当時の常識と呼べるものではないか。それらがみな「喜助」によって相対化されたことになる。すなわち、この作品は相対化から物語が始まっていたとさえ言えるのである。

このことは、さらに「二百文」の話へと繋がっていく。ここには明確に示されていないが、「二百文」というのが、はした金に過ぎないということが前提となって書かれている。（それはこの後の「二百文をでも」ではっきりする。）つまり、「喜助」は、一般的には喜ぶほど金額ではないものをもらって喜んでいるということである。「二百文」が、ひいてはお金というもの（「財

産」）が相対化されたのであり、見方によって意味や価値が変わる相対的なものだということを示されていたのである。

この「喜助」の話の後にそれに対する「庄兵衛」の考えが書かれる。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引き比べて見た。（中略）彼と我との間に、果たしてどれ程の差があるか。

（中略）

さて桁を違えて考えて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいるのに無理はない。その心持はこっちから察して遣ることが出来る。しかしいかに桁を違えて考えて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知っていることである。

同心の生活と「喜助」の生活とでは、金額（生活費）はまさに桁が違う。しかし、生活のために右から左へとお金をなくしていることは変わらないとしている。見方によれば差がないことになるというのである。これは、「庄兵衛」の同心としての生活が相対化されたと言えるだろう。さらに「鳥目二百文をでも」という言い方は、「二百文」が「庄兵衛」にとっては貯蓄とは呼べないような金額、はした金であることを示している。ここでも「二百文」でも、貯蓄としてして喜ばれることがあるということが示されている。この貯蓄というのは、鴎外のいう「財産」と同じ意味だろう。つまり、「財産」（という観念）は見方に依存した観念であり、所詮相対的なものなのだということになる。これは当たり前なことのようにも思えるが、我々はともするとお金というものは多ければ多いほどよいものだと思っているのではないか。『縁起』に「人の欲には限りがない」とあったが、「限りがない」かどうかは別としても、多い方が良いに決まっていると思っている。けれども、ここでは多くても少なくても変わらないというのであり、そのような意味において財産の考え方（観念）が相対化されたということである。

さらに、ここに「足ることを知っていること」と「知足」ということが出て来る。「財産」の話はこの「足ることを知る」ということを書くためのものだとすれば、こちらの方が主題ということになる。ただし、これはあくまでも「庄兵衛」がそのように見ているだけであり、実際に「喜助」が足るを知っているかどうかは解らないのである。この点については後に詳しく述べるが、「知足」ということが、十分描かれているか疑問が残るのである。また、「不思議なのは喜助の欲のないこと」と、「知足」というのが、単に金銭だけのことだけではなく、「喜助」の人格全般についての感想のようにもとれる。

この場面について、すでに小泉浩一郎氏によって相対的という指摘がなされている。

つまり、この段階で庄兵衛は、自己と喜助との経済的状況の落差を相対的な問題とみなし、その落差を絶対的なものと見る視点を排除しているのである。

（『高瀬舟』論―〈語り〉の構造をめぐって―」―『近代日本文学の諸相』平成二年三月）

小泉氏は二人の関係に注目して「相対的」としている。さらに、小泉氏はこれに続く本文にも注目しているので、先にそちらを引用しよう。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合っている。手一ぱいの生活である。然るにそこに満足を覚えたことは殆ど無い。

これを受けて、小泉氏は次のように述べている。

つまり、ここで「いかに桁を違えて考えて見ても」庄兵衛に理解できない喜助の境位に庄兵衛は直面しているのであり、それは喜助と庄兵衛との落差が、＜桁の違い＞という相対的なるものから、ある絶対的なるものに転化しつつあるということを意味している。

小泉氏の指摘にあるように、「知足」とはそもそも絶対的なものである。金額や状況などに依存しない考えであり、絶対的と言える。足るを知る「喜助」と、それを知らない「庄兵衛」とには絶対的な差がある。しかし、本稿では二人の関係ではなく、「財産」の方を問題としているので、小泉氏の指摘する相対的、さらには絶対的ということと、本稿でいう相対的というのは、その指す対象が違っている。本稿では同じ二人の対比でも、対比そのものではなく、その対比から金銭、「財産」というものが相対化されていることに注目するのである。

さらに、「庄兵衛」は「喜助の頭」に「毫光」を見る。

庄兵衛は只漠然と、人の一生というような事を思って見た。（中略）かくの如くに先から先へと考えて見れば、人はどこまで往って踏み止まることが出来るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気が附いた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思った。

「喜助」は単なる流人からあたかも聖人になったかとさえ読めるのである。そこには「知足」ということが如何に困難で、それが実行できていることがどれほど素晴らしいか、ということが反映していると考えられる。また前半は、『縁起』にあった「人の欲には限りがないから、銭を持って見ると、いくらあればよいという限界は見出されないのである。」というのを受けてこのように書かれていると考えられる。しかし、「喜助」は「踏み止まって」いるのだろうか。先ほどの引用で「喜助」は「わたくしはこの二百文を島でする為事の本手にしようと楽しんでおります。」と先のことを考えている。「本手」とは、これから増やそうという意図も読めるのではないか。これが「喜助」の「欲」の初めではないかとも読めるのである。無論「喜助」は現状に満足している。けれども、それはこれまで苦しさの頂点（どん底）にいたので、この先どのような状況になっても悲しむことはなく、何の心配もせずに満足しているということに過ぎないのであり、「踏み止まって」いるとは言い切れな

いのではないか。

この点については、すでに小田島本有氏による同様の指摘がある。

しかし、喜助の側は、自分が「足ることを知っている」とか、「踏み止まって見せて」いる、などという意識は毛頭ない。庄兵衛の喜助に対する驚異の念は、彼が自分の生活感覚に照らして喜助を眺めているからであり、喜助の発言を喜助の次元において捉えることができないという限界を抱えていたからである。

（「疑問の行方―森鴎外『高瀬舟』論―」―「釧路工業高等専門学校紀要」平成十六年）

つまり、「喜助」が「知足」かどうかよりも、そのように捉えている「庄兵衛」の方が問題ということになる。なぜ、「庄兵衛」は「知足」として捉えるのか。それはひとえに「満足」ということが問題となる。「庄兵衛」は生活に満足したことが無く、一方で「喜助」は「庄兵衛」からすれば、とても満足できるような状況ではないのに満足しているのである。このことが「庄兵衛」からすれば「驚異」なのである。そして、満足しているということは「足ることを知ること」だと捉えているのである。けれども、満足さえしていれば、「知足」ということになるだろうか。悲惨な状況のために、満足させられているに過ぎないとも考えられるのである。ましてや視点は「庄兵衛」にだけあって、「喜助」の内面については彼の言葉から推測するしかないのである。「喜助」が「知足」ということをどのように捉えていたかは知るよしもないのである。「知足」というのはあくまでも「庄兵衛」の見方であり、過大評価の可能性もあるということになる。これでは、「知足」ということも、見方に依存していることになり、相対的ということになってしまう。外から見た場合は「知足」に見えるが、内から見た場合が解らないということである。そして、先ほども指摘したように、「喜助」はこれまでは確かに満足してきたが、この先のことを考えている「喜助」もそのままなのか疑問もないわけではない。いわば、衣食足りて初めて知ることがあるのではないかということである。それ故、『縁起』に「二百文を財産として喜んだのが面白い」とあったように、「二百文」というものが、ひいては「財産」というものが、相対的だと捉えればよいのではないか。また、主題はやはり「知足」よりも「財産」ということになるだろう。

Ⅲ

次に「安楽死」をめぐる話である。「庄兵衛」に問われて、「喜助」はそのいきさつを語り始める。

「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしまして、なんとも申し上げようがございませぬ。跡で思って見ますと、どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。

（中略）

或る日いつものように何心なく帰って見ますと、弟は蒲団

の上に突っ伏していまして、周囲は血だらけなのでございます。（中略）『済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思ったのだ。笛を切ったら、すぐ死ねるだろうと思ったが息がそこから漏れるだけで死ねない。（中略）どうぞ手を借して抜いてくれ』と云うのでございます。

二人きりの兄弟で貧しい暮らしをしていたが、弟が病気で働けなくなる。そこで弟は兄のために自殺をしようと自ら首を切る。しかし、剃刀では死ぬことが出来ず、兄に「手を借して」と頼む。死のうとして死にきれない弟をどうすれば良いのか。

弟はじっとわたくしを見詰めています。わたくしはやっとの事で、『待っていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は怨めしそうな目附をいたしましたが、又左の手で喉をしっかり押えて、『医者がなんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と云うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持になって、只弟の顔ばかり見ております。（中略）わたくしは『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変って、晴やかに、さも嬉しそうになりました。わたくしはなんでも一と思にしなくてはと思って膝を撞くようにして体を前へ乗り出しました。弟は衝いていた右の手を放して、今まで喉を押へていた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかり握って、ずっと引きました。

「喜助」はまず「医者」を考える。弟がまだ生きている以上、それは当然の対応だと考えられるが、苦しむ弟からの催促によって、「途方に暮れたような心持」になる。『翁草』にはなかった逡巡がここに描かれている。苦しんでいるものを救うために殺すことになっても良いのか、「安楽死」のもつ最も基本的な問題が、「喜助」の逡巡として描かれている。

この後、弟の目に訴えられて、とうとう剃刀を抜いてやることになる。当然抜けば弟が死ぬことが解っていたのだから、楽に死なせて遣ろうとした事になる。鴎外のいう「ユウタナジイ」ということになる。ちょうどその場面を人に見られてしまう。

この時わたくしの内から締めて置いた表口の戸をあけて、近所の婆あさんが這入って来ました。留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように、わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。（中略）わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、真直にこかうと云うだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手応は、今まで切れていなかった所を切ったように思われました。

この「婆あさん」は『翁草』には登場しない。「婆あさん」は剃刀を抜こうとしたときに現れたので、その前の二人のやりとりは聞いていないことになる。そのため、「婆あさん」から見れば、殺そうとしていたということになる。だから「婆あさん」はすぐに逃げたのである。この「婆あさん」が見たということが、この行為が見方によって受け取られ方が違うという事を明確に示している。「喜助」は弟を楽にしてあげようと思った、あるいは救おうとした。すなわちそれは「安楽死」ということ

になるが、その「安楽死」は「婆あさん」から見れば、殺人に見えるということである。見方によって意味が変わるということだが、ここではその見方というのが、まさに見るという行為によって示されているのである。そして、見方や立場に依存しているということは、「安楽死」は相対的なものということになる。その「安楽死」に内在していた相対性が、まず「喜助」の逡巡として描かれ、さらに「婆あさん」の登場により、いわば外在的に描かれることになったのである。二段階で書かれているということである。（無論、「婆あさん」が見なければ、単なる自殺で済んでしまっていたということもあるだろうが。）

また、「婆あさん」が二人のやりとりを聞いていなかったということは、この話は「喜助」以外知るものが無いということをも示している。つまり、単に「喜助」がじゃまな弟を殺しただけという可能性もないわけではないのだ。しかも、語り手は、読者にそのような疑いを持たせるような語り方をもしている。

喜助の話は好く条理が立っている。殆ど条理が立ち過ぎていると云っても好い位である。これは半年程の間、当時の事を幾度も思い浮べて見たのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるその度毎に、注意に注意を加えて浚って見させられたのとのためである。

この「殆ど条理が立ち過ぎている」とあるのは、あらかじめ言い訳をこしらえていたのではないか、という疑問を読者に誘発させる。最初は「全く夢中でいたしましたのでございます。」と言っていたのである。罪を逃れるためにこのような嘘をついていたかもしれないのである。けれども、語り手はこの点をはっきりと否定している。先にも述べたように、この作品では語り手の言葉は事実として読まれるのであり、特に嘘をついていたわけではないということになる。とすれば、逆に、何故わざわざこんな紛らわしいことを語ったのか疑問になる。これはメタフィクションとして捉えられるだろう。つまり、読者がこの「喜助」の説明に対して思うだろうことを先回りして書いておき、否定しておくということである。前半で「喜助」はすでに聖人然としていたのである、悪人として読まれるような可能性をあらかじめ排除しておいたということである。

そして、このような「喜助」の話を聞いて、「庄兵衛」は弟殺しということに疑問を持つ。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果して弟殺しと云うものだろうか、人殺しと云うものだろうかと云う疑が、話を半分聞いた時から起って来て、聞いてしまっても、その疑を解くことが出来なかった。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだらうから、抜いてくれと云った。それを抜いてて遣って死なせたのだ、殺したのだとは云われる。しかしその儘にして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であったらしい。それが早く死にたいと云ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救って遣ろうと思って命を絶った。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであったと思うと、そ

ここに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

今度は「婆あさん」と「庄兵衛」とが対比される。「婆あさん」は人殺しと見たのに、「庄兵衛」は疑問を持つのである。「喜助」は「婆あさん」によって相対化され、さらに「婆さん」は「庄兵衛」によって相対化される。しかし、なぜ「人殺し」に「疑」が起こるのか。確かに、「喜助」の言葉を踏まえれば、「庄兵衛」が「疑」を持つのも当然のように読める。けれども、それは我々（読者）が「安楽死」ということを知っているからではないか。この作品の当時の人間として自然なのだろうか。『縁起』には「人を死なせて遣れば、即ち殺すということになる。」とか、「従来の道徳は苦しませておけと命じている」とあった。「庄兵衛」はこの「従来の道徳」の中にいたのではないのか。（無論、「従来の」というのは江戸時代を指すのではなく、この作品の発表された大正時代までをも含めたものであるが。）それに従えば、単に人殺しとして捉えるのではないか。『翁草』においても、あくまでも殺人なのである。ただ「下愚の者の弁えなき仕業」だから「死罪一等」を許されたに過ぎない。それとも、このような「疑」を持つことは当然のことであって、江戸時代の人でも、現代でも同じだと言いたいのだろうか。けれども、ここで注意したいのは、「喜助」と「庄兵衛」の差である。「喜助」は「安楽死」をさせようとしたわけではない、夢中でしたことである。それに対して「庄兵衛」の方は、観念として「安楽死」を捉えているのではないかということである。あるいは、「安楽死」のようなことはこれまでもあったかもしれない。例えば、切腹における介錯などもそのように解釈できる。しかし、介錯をする者は自分が「安楽死」を実行しているなどとは考えてはいないだろう。それを「安楽死」と捉えることのできるのは、そのような観念が確立してからである。実行している「喜助」と、それについて考える「庄兵衛」は同じではないのだ。「喜助」の行為は自然と捉えられても、「庄兵衛」の方は必ずしもそうとは言い切れないのである。さらに、鴎外は「喜助」の行為に「安楽死」と同じものを見ていたのだが、「庄兵衛」はちょうどその鴎外の位置にいるようなものなのである。

ただし、このことには、これまでの「喜助」とのやりとりも係わっているだろう。出来事と語りの順番が逆になっているため、「庄兵衛」は結果を見てから経緯を知ることとなったのである。「庄兵衛」に「疑」が起こる根拠は、何よりも今目の前にいる「喜助」の様子ではないか。「毫光」までを見た「庄兵衛」は、潜在的に「喜助」を肯定したいと思っていたとも考えられる。先入観と言ってしまえばそれまでだが、単に「喜助」の話だけが「疑」の理由ではないかもしれないのである。しかし、そうではあっても、やはり「庄兵衛」は「従来の道徳」からはみ出しているのではないか。

そして、後半はまさに「ユウタナジイ」の説明である。『縁起』にあった「即ち死に瀕して苦しむものあったら、楽に死なせて、その苦を救って遣るが好いと云うのである。」という「安楽死」の説明そのものである。「庄兵衛」はあたかも作者によって「安楽死」の説明役をやらされているようなものなのである。ここ

でも、「庄兵衛」は作者鴎外と重なっていると言えるだろう。

しかも、ここには「安楽死」のもう一つの側面である、罪になるかという点が書かれている。これは『縁起』には明確に書かれていなかったものである。楽に死なせてやるべきかどうかという問題と、さらにその先の結果として、罪となるかという問題が示される。救おうとしたのなら、罪にはならないのではないかいうことである。言うまでもなく、これもまた見方によるということになる。そして、この時代において、罪かどうかを決めるのは「お奉行様」なのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云う念、オオトリテエに従う外ないと云う念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、その儘自分の判断にしようと思ったのである。そうは思っても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬものが残っているので、なんだかお奉行様に聞いて見たくてならなかった。

次第に更けて行く朧夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った。

何故、「お奉行様」の前に「オオトリテエ」という、時代を逸脱した言葉があるのか。無論、これは語り手が近代人であることによるのだが、しかし、これまで作品の舞台に即した語り方をしてきたのであり、なぜここで逸脱したのか疑問も残る。が、その点は後に述べるとして、先に罪についての考察をしよう。前述のようにこの時代、罪を決めるのはあくまでも「お奉行様」である。同心はその判断に従えば良いのであり、「お奉行様の判断を、その儘自分の判断にしようと思った」のである。しかし、腑に落ちないのである。それはなぜだろうか。

一つには、そもそもその罪が「遠島」であることによるだろう。殺人であれば、死罪である、なぜ「喜助」は死罪ではなく「遠島」になったのか。作品全体が原典に比べてかなり詳しく書かれているにもかかわらず、この理由だけは省略されている。なぜ、『翁草』にあった「下愚の者の弁えなき仕業」という理由が書かれなかったのか。それは、足ることを知り「毫光」のさす「喜助」を「下愚の者」とはできなかったということではないか。そのため理由が書けなかったのである。しかし、その理由がないことにより、なぜ死罪ではなく、「遠島」になったのかが解らないのである。「遠島」というのは、いかにも中途半端な処置ということになってしまい、「腑に落ちぬものが残っている」のである。

もう一つには、「安楽死」というのが近代的な考えであるからではないか。引用を繰り返すが『縁起』には「従来の道徳は苦しませて置けと命じている。しかし医学社会には、これを非とする論がある。」とあった。ここで「医学社会」と言っているのは、言うまでもなく鴎外の時代の「医学社会」であり、近代的な考え方ということになる。鴎外は江戸時代の話に近代に通じるものを見つけて面白いと思ったのである。そして、「安楽死」の説明役をあてがわれた「庄兵衛」は、必然的に近代的な視線から「喜助」の行為を見るようなことになったのである。これは物語世界の人物に対する作者の介入としても捉えられ

る。あるいは、前述のように鴎外と「庄兵衛」が重なったと言っても良い。いわば「庄兵衛」はこの作品で鴎外の代弁者となっているということである。そして、それが「安楽死」として見る見方である。そのような見方は、当然この作品の舞台となっている時代にはないものであり、「庄兵衛」は「従来の道徳」からはみ出していることになる。しかも「庄兵衛」は当然のことながらそんなことは自覚していない。だから、「いろいろ考えて見て」も答えなど見つかるはずもなかったのである。そう考えるなら、「従来の道徳」に従っている「お奉行様」の判断が、「腑に落ち」ないのも当然だろうし、「お奉行様」に聞いて見たく」もなるだろう。

また、この近代的ということが、先の「オオトリテエ」という言葉にも繋がるのである。「安楽死」というものが、近代的ということは、語り手の現在に関わる問題なのであり、語り手の現在の言葉が使われたのではないかということである。無論、これは語り手、ひいては作者鴎外の無意識についての勝手な憶測に過ぎないが、この場面に「オオトリテエ」という言葉が書かれることの奇異さは、このような憶測にも繋がるのである。

しかしながら、ここに「オオトリテエ」や「お奉行様」が登場してくるのは、単に罪に係わってのことだけではない。というよりも、単に罪に係わってのことであれば、「お奉行様」だけで良いのであって、「オオトリテエ」などが引き合いに出されることもなかっただろう。すなわち、この「オオトリテエ」とは、「お奉行様」も含めて、単に権威ということではなくて、相対的に対する絶対的という意味があるのではないかと考えるのである。ではなぜ、ここに絶対的なものが必要なのか。すでに述べてきたように、「庄兵衛」が「いろいろに考えて見た」のは、それまでなかった相対的な見方（鴎外の目線）に「庄兵衛」が染まっていた、いや翻弄されていたからと言っても良い。ここまでの「喜助」とのやりとりにおいて、「庄兵衛」の封建的な常識はすべて相対化されてしまっていたと考えられる。それによって、「庄兵衛」はいま「疑」にとらわれているのである。そこから逃れるためには、絶対的存在である「お奉行様」に頼ろうとしたということである。相対化から逃れるには絶対的な価値観に縋るしかない。まさに「オオトリテエに従う外ない」ということになる。それは封建時代の住人が近代的かつ相対的な価値観にさらされた結果なのである。特に、「安楽死」には相対的、かつ近代的な価値観が両方あったため、その対極として「オオトリテエ」が求められたということになる。換言すれば、「安楽死」にあった、相対性と近代性が「オオトリテエ」という言葉を生み出したとさえ言えるのである。けれども、すでに近代的な見方に染まった「庄兵衛」にとって、「お奉行様」も絶対的ではなく、相対的なものとなってしまっていたのである。だからやはり「腑に落ち」ないのである。

Ⅳ

最初にあげた二つの主題、「財産」（「知足」）と「安楽死」を中心に、相対的という視点からの分析を行った。その結果この

作品は最初から「遠島」、「京都」、「牢」というものが相対的なものであることが示されていた。「遠島」は悲しいもの、「京都」は結構なもの、「牢」はつらいもの、それら常識であるというよりも絶対的な価値観というべきものが、「喜助」によって相対化され、みな相対的であることが示されたのである。「庄兵衛」はこの常識を代表するものとして登場し、相対的な見方の矢面に立たされたのである。無論、これは「喜助」の「類のない」ことを示すため、ひいては「知足」が類のないものであることを示すことが目的であったとも考えられるが、結果的には、これまで述べてきたように、この作品は最初から相対的な見方が提示されていたと読めるのである。

「知足」というのは、確かに絶対的な価値観である。たとえはした金でも満足するのであり、金額などの観点に依存していない。しかし、「喜助」自身が「足ることを知る」かどうかは解らない。むしろ、本稿で注目するのは、『縁起』にあった「財産」の方である。「二百文」でも財産として満足する者もいれば、さらに多くのお金を持っていても満足しない者もいる。「財産」とはまさに相対的なものだということである。

「安楽死」についてはこれまで何度も指摘したように、そもそも相対的なものである。特に、「婆あさん」の登場により、見方によるということがこの作品では明確に示されていたのである。しかも、「安楽死」はもう一方で、近代的という側面があった。それが「オオトリテエ」という言葉に繋がっていた。また、この近代的ということにも「庄兵衛」は巻き込まれていく。「庄兵衛」が「喜助」の罪に「疑」を抱くことは、そのまま「安楽死」を肯定することになるのだが、それは、作者鴎外の視線で「喜助」の行為を捉えたことになる。近代人鴎外と封建時代の人物である「庄兵衛」が重なるのである。そのような近代的、相対的な価値観に翻弄された「庄兵衛」は、最終的に、その当時における絶対的な存在である「お奉行様」に頼ろうとした。しかし、すでに「お奉行様」も救いにはならなかった。「お奉行様」もまた相対化されたのである。

このように、この作品においてすべてと言って良いほどのものが相対化されていた。では、その相対化はどこからもたらされたのだろうか。それは、偏に「安楽死」ではないかと考える。というのも、「安楽死」が相対的と言うとき、同時にそれは従来の考え方、「従来の道徳」も相対的ということになるからである。ちょうど「婆あさん」が「庄兵衛」に相対化されていたように。「遠島」が悲しい、「牢」がつらい、「財産」はあればあるほど良いなど、従来、常識と思われていたこと、いや絶対的と思われていたことが相対化されていたのである。つまり、この作品で相対化されていたものは、「安楽死」を除いて従来の考え方、「従来の道徳」だったのである。そして、「従来の道徳」が絶対的なものではなく、相対的なものに過ぎないと認めることによって、初めて「安楽死」という新しい見方を認めることができるようになるのである。すなわち、「安楽死」の相対性を描くことは、同時に従来の考え方の相対的なことを書くことでもあったのである。さらに、この相対化は単にこの作品

の中だけで終わるものではなく、この作品を読む読者へと広がっていくだろう。特に、この作品の発表時の読者にこそ波及していくべきものだろう。それによって「安楽死」が認められることにもなるだろうから。いわば、相対化は「安楽死」から始まり、「安楽死」へと収束していくのである。

無論、これらのことについて、作者鴎外がどれ程意識していたかは解らない。けれども、「安楽死」について書こうとしたときに、この相対的ということがこの作品の基本的な構図として織り込まれたとすべきだろう。

相対的、あるいは相対化は、この作品を統一する主題とは言えないかもしれないが、この作品を動かす力、エンジンだったことは間違いないのである。